

埼玉育ちのグローバル人

僕が僕であるために～世界という世界の中で～

第3回 喜び イタリアでの事～メッセージ

オペラ歌手テノール、新国立劇場合唱団メンバー

コル・カント合同会社 代表社員、NPO 団体 富士見みんなでプロジェクト 代表

東海林 尚文さん



埼玉県マスコット「コバトン」



【最終回にあたって】

最終回となる今回は、楽しいながらも競争しなければいけなくたくさんの苦しみ、悩みを抱えて過ごさなければいけなかった芸大時代が過ぎ去り、一人のオペラ歌手として本当の意味で成長していった、イタリアはフィレンツェに留学するときの話を中心に書きたいと思っている。

【留学先の決め方は…】

さて、いよいよ私がオペラ歌手として少しずつ成長していくきっかけとなったイタリア留学について書く前にイタリアという国についていくつか書いていこうと思う。インターネットの発達によって今でこそ日本には驚くほどイタリアの情報があふれ、少しでも興味のある人ならイタリアにあるかなり小さな町の情報までも簡単に分かってしまうだろうが、私が留学していた頃のイタリアは、通貨がリラからユーロに変わったばかりで、現在に比べるとまだまだ情報も少なく、現地に行くまで分からないことがとても多かった。

実は本格的に留学する 2 年ほど前にツアー旅行でイタリアに行ってみたことがある。いわゆるスタンダードなツアーでミラノ、ローマ、ヴェネツィア、フィレンツェと有名な大都市を回るいわゆる観光ツアーだったのだが、この経験がとても良かったと思っている。私がフィレンツェに留学を決めたのも、このツアーでフィレンツェという街の雰囲気を好きになったという理由が一番にあげら

れるからだ。一般的に音楽家の留学というと現地に知り合いの先生がいるからだとか、音楽学校に入学するために町を選ぶなどが基本となるのだが、私の場合は特に知り合いなどいかなかったため、好きな場所フィレンツェで住みたいという希望のみの選択となってしまった。しかし、その選択は間違っていなかった。



【写真：留学先のフィレンツェ】

【新しい生活の始まり

徐々に“住民”になっていくまで】

当時はオペラを勉強するためにイタリアに留学することもあまり珍しくなくなっていたが、大半の留学生がミラノに留学していた。それは世界的オペラハウスのミラノ・スカラ座があったり多くの有名な先生がいたり、優秀な音楽院も外国人に門戸が開かれていたりと素晴らしい環境が整っていたからだと思われるが、私にはあまりに巨大で都会的な雰囲気がどうしても受け入れられなかった。私が留学先として選んだフィレンツェはその点、もちろん世界有数の観光地ではあるが、町

はとてもコンパクトでとても落ち着いていて、時間がゆっくり流れているように感じられる場所だった。

そしてなにより、留学する目的となる事柄（職業）がとにかく多く多種多様な人たちとの交流ができたことも素晴らしい経験となった。具体的には料理の勉強で留学している人が多かった気がするがフィレンツェがルネッサンス発祥の地という事もあり、画家や絵画の修復や彫刻、靴などの革製品を作る人や陶器に絵付けをする人など、本当に様々なことにチャレンジする人たちに出会うことができた。中には何をしに来ているのか分からない人もちらほらいたけれど（笑）、いろんな価値を持っている人たちとたくさん出会えたことがとても刺激になったし、当時の私には心強かった。みんなそれぞれ自分の夢をかなえるために留学して、歯を食いしばって頑張る姿は私の心に十分火をつけてくれた。



【写真：ピサの斜塔前で】

当時を振り返ると、とてもいい思い出がたくさん出来た、素晴らしい留學生活だったのだが、もちろん初めから順風満帆だったわけではない。初めての海外生活、初めての一人暮らし、初めてのホームステイ、初めての語学学校などなど、初めてのことが一気に降りかかってくる留学はとにかく慣れることから始めるしかない。生活に慣れるという

事は言い換えればその場所での経験を積み重ねるという事なのではと思った私は、留学して最初の1か月間毎朝、語学学校に通うときに同じ道を通り、同じカフェに入り、同じものを頼むという事やってみた。すると不思議なことに道で会う人とあいさつを交わすようになり、カフェの店員とも少しずつ会話をするようになって、町に自分がなじんできたように思えてとても自然にこの町で自分が住人になっていけると実感した記憶がある。このことは自分が留学した時にとても助かったので、これから留学する人には是非ともやってもらいたいことなのだが、留学したらしばらくは同じ店に通って店員と仲良くなることをお勧めする。その国での生活になじむにはとても効果があると思う。

【留學生活で大切なこと】

留學するといってもその目的によって様々なアプローチがあると思われるが、最も大切なことはその現地の言葉のある程度習得しなくてはならないという事があげられる。語学そのものが留學の目的になっている場合もあると思うが、私の場合はその先にある声楽、音楽が目的だったのでイタリア語を学ぶことが絶対に必要である事柄の一つであった。語学の習得に必要なことはアウトプットするべきという事を聞いたことがある方も多いと思うが、これは本当に当てはまっていると思う。

一生懸命に参考書などで勉強して机上で反芻して覚えたことでも、実生活で何ら役に立たないことがとても多かったし、逆にイタリアの友人から教えてもらう生きた言葉やニュアンスを理解し、使うことが増えていくたびに、イタリア人とのコミュニケーションはスムーズになり、より深くなっていったような気がする。こればかりは個々の性格が関係してくるかとは思いますが、恥ずかしがることなく自分の意見を自分なりの言葉で表現する人ほど現地の言葉や習慣になじむスピードも速く、現地の人間と仲良くなっていたように思う。

そういった意味でもまずは現地の生活に慣れる

ことが留学を有意義なものにする最良の方法だといえるのではないだろうか？

【人生の師匠との出会いまで】

話が少し留学する心構えみたいになってしまったので、また私の留學生活に話を戻そうと思う。

実は大好きなフィレンツェで留学をスタートさせるといっても、音楽家としては致命的なことがあることに留学してから気が付いた。それはオペラを教わる先生がいないという事だ。

留学するにあたって音楽家の場合、まずは教わりたい先生を頼って留学するということが大半をしめる中、私はフィレンツェに行きたいという思いのみで留学してしまったので、先生、または指導者に関しては全く何のあてもなく留学してしまった。これは本当に大変だった。まず留学してからすぐに語学学校に通っていたとはいえ、音楽で留学する人間の少ないフィレンツェには最初の頃は音楽でつながる日本人もいなかった。仕方なく、語学学校の世話役のようなイタリア人の事務員に「オペラの声楽を勉強したいので先生を紹介してください」と一晩考えたイタリア語で相談したことが今でも忘れられない。「わかった、少し待っていてね」と言われてから数日は何ら音沙汰がなかったので半ばあきらめかけていたところに「私の知り合いのオペラ歌手がやってくれるから連絡とってみなさい」と不意にメモ書きされた住所と電話番号をわたされた。

これが後に私の人生を大きく変える指導者との出会いになるわけだが、本当に何がきっかけになるかはわからないものだ。今思い返せば、当時の語学力では電話で会話するなんて言うのは至難の業だし、聞くことも話すことも初歩のレベルだったにも関わらずなんら恐れることもなく電話したことが自分でも不思議でならない。会話に自信がなく電話するのが億劫だったら先生との出会いはなかっただろうし、今の自分はなかっただろう。とはいえ本当にしゃべれなかった私は当然、半分も内容が分からなかったが先生が「明日の11時に家に来い。」と言われたような気がしたので「OK!」と

いって電話を切った。フィレンツェ郊外にサッカースタジアムがあるのだが、その近くに先生の住んでいるアパートがある。翌日早速バスに乗ってまだ顔も知らない先生の家に向かう途中、見たこともない景色にドキドキしながら期待と不安の中、そこに向かったことを今でもはっきりと覚えている。

【シーカ先生から教わったこと】

素晴らしい出会いだった。シーカと名乗るそのテノール歌手はとても70近い高齢とは思えないエネルギーに満ち溢れていて、音楽大学を卒業したとはいえ、日本から来た、何もできない私をこころよく受け入れてくれた。最初のレッスンで何を歌ったのか忘れてしまったが、まず初めに言われたことが衝撃的だった。・・・「君の歌は声の出し方が違うよ。」・・・優しくゆっくりと話してくれはしたのだが・・・そう、今までの全てを否定されてしまった(笑) 今となっては何故そのようなことを言われたのか良く分かるのだが、当時の私にとっては、初めてついた先生から最初に言われた言葉としてはとても驚いたし、何が違うのか本物の歌い方とは何なのかという興味も沸いてきた。

それからシーカ先生とのレッスンがスタートすることになる。ある程度は古い自分の殻を破ってすべてを受け入れる覚悟を決めていたとはいえ、まさか0から始まるとは思わなかった。0というのは、声を出すということ。発声練習だけでレッスンが終わってしまうことが半年以上続いた。歌を習いに来ているにもかかわらず、歌なんかはその半年間ほぼ歌わせてもらえなかった。しかしながら、シーカ先生は発声練習だけのレッスンにもかかわらず、とても多くのことを、教えてくれた。それこそ歌に対する考え方が180度ひっくり返ってしまうような目からうろこの事ばかりだった。その中でも特に印象に残っている言葉がある。シーカ先生は私にこんなことを言ってくれた。「あなたはこれからプロの歌手になろうとしている。それは舞台の上でお客様に対して歌い、演じるという事です。例え発声練習とはいえ劇場の舞台の上で2000

人の聴衆の前で歌っているつもりでやりなさい。」



【写真：レッスン風景】

それまでの私は考えたこともなかったがことだったが、シーカ先生は練習の時から本番のことを想定して想像して行動するという事を習慣づけるんだよと、ことあるごとに私に言ってくださった。これは歌だけでなく日常生活においてもとても役に立つことだと思う。練習をただの練習と考えずに、本番を想定して想像する。特に若い世代の方々に言いたいことなのだが、与えられたことだけに満足するのではなく自分で考えて想像して実行するという事が物事の習得には一番早いと思われる。その訓練をできるだけ早いうちからやっておくことが、重要なのではないだろうか。



【写真：恩師 シーカ先生と】

【メッセージ】

失敗を恐れずに、最高の自分を想像して今の自分と向き合うことができれば、どのような状況になったとしても乗り越える力が自然と身について

いると思う。シーカ先生はただ単に歌のレッスンをしていたのではなく、歌のレッスンを通して自分の可能性を信じること、自分の成功を想像すること、そこにたどり着くために何をしなくてはいけないのかを自ら考えることという普遍的な成功へのステップを与えてくれていたのだと思っている。その訓練をイタリア留学中約2年半の間、知らずにやってこられた私は、留学前のまわりと比較するばかりで自分というものを見失っていたマイナス思考な音楽家とはまるで別人の、自信に満ち溢れた一人の声楽家、オペラ歌手に成長できたと思っている。シーカ先生はいつでも私に自信を与えてくれた。言われたことが少しでも出来るようになるのととても良くほめてくれたし、出来ないことがあっても何度も何度も根気強く教えてくれた。

残念ながら、日本では出来ないことを叱られることはあっても出来たことを褒められた経験がない。他人と比較するだけの窮屈な日本の考え方とは違い、イタリアでの勉強はとても楽しくのびのびと、自分が自分らしく自由な考え方で勉強することができる。そんな環境の中で、音楽の本当の楽しさを、そして自分が自由な表現者であることを発見出来た、とても素晴らしい経験だった。その経験は、帰国して10年がたった今でも私の音楽家生活の根幹になっていて音楽を楽しみ自分が自由な表現者であるという確固たる信念をもって音楽活動をしている礎になっている。素晴らしい師と出会い新しい価値観に触れることのできる海外留学は人生の最高のエッセンスとなることは間違いない。

まだまだ書きたいことはたくさんあるが文字数に限りがあるので今回は私が留学で得た、尊敬する師との出会いや教わった考え方などのことで締めたいと思うが、これから海外留学を志している若い希望達が有意義にそして最高の人生をつかむためのちょっとしたきっかけになってくれればありがたいと思っている。

最後になるが、繰り返してこの言葉を皆さんと共有したい。

「失敗を恐れず、最高の自分を想像して日々を確実に行動していれば夢は必ず叶う。」

私はそれを信じている。

2017年8月22日 自宅にて 東海林尚文
(最終回)